Ａ － １　学校研究

１　研究主題

『確かな学力の向上につなげる「活用力」の育成』

－　活用の場面を重視した授業実践をとおして　－

２　主題設定の理由

ますます多様化する社会の変化に伴い、学校教育の中でも「学びの質」の転換が求められている。新学習指導要領が小学校では平成23年度より、中学校では24年度より完全実施される。改正教育基本法で明確になった教育の理念をふまえ「生きる力」を育成する観点から各学校で様々な創意・工夫を生かした教育実践が展開されていくと思う。このような状況下にあっても、学校教育の第一の責任が「一人ひとりの生徒に確かな学力を身につけさせる」であることに変わりはない。

本校は全校生徒数32名という小規模校であるため、保育所段階から生徒同士の人間関係が固定化されており、明るく素直である反面、指示待ち的な面も多く見られ、お互いに切磋琢磨し合って学ぶという雰囲気が不足している。授業態度も落ち着いた雰囲気であるが、積極的に自分の意見を出し合い、高め合おうとする姿を育成していくことが大きな課題となっている。

平成20・21年度の2年間にわたり、文部科学省学習状況調査協力校、県学力向上モデル推進校及び輪島市教育委員会学校研究推進事業の指定を受けて、教科の特性を考慮しながら、授業の中に「考える活動」「表現する活動」の場面を取り入れることによって、活用力の向上をめざしたいと考え、本主題及びサブテーマを設定した。

３　研究の視点

（1）活用力向上につながる授業力の向上の視点から

①教科の枠を超えた校内授業研究の実践
②模擬授業の実施
③ビデオ授業研究の実施
④単元指導計画の再構成とそれに基づく授業実践
⑤「活用力」が身に付いた生徒のイメージ像の一覧表作成（全教科）
⑥市内全中学校と連携した授業研究会・整理会の推進

（2）教師・生徒・保護者が連携した学校研究の推進の観点から

①生徒の学習意欲・意識向上のためのオリエンテーションの実施
②学校・家庭連携推進委員会の機能化

（3）全国学力・学習状況調査、県基礎学力調査の分析結果活用の観点から

①数学の苦手分野の克服のための補充学習・できる生徒をさらに伸ばすのための発展学習（数学担当教諭を中心とした組織的な小グループ学習）の実施

（4）成果の検証のための手だて

①個別学習カルテの活用
②全国学力・学習状況調査、県基礎学力調査の分析結果
③単元テストによる学習達成状況の結果
④学力診断テストの結果
⑤授業及び家庭学習における生徒の学習状況の観察
⑥定期的な学習相談の活用

４　研究の組織

校　長
教　頭

研　究　推　進　委　員　会

学校・家庭連携推進委員会
【研究推進委員6名
保護者各学年代表2名×３　計12名】

学力育成部

●授業研究担当

・基礎・基本の充実
・活用力授業研究の推進
・探究学習の実践

●学力向上担当

・南中生としての教養
・学力向上の検証
・個人学習カルテの活用
・学習オリエンテーションの定期的な実施

キャリア教育部

●進路学習担当

・各学年の進路学習の充実
・進路学習会の実施
・進路学習と修学旅行の連結

●ふるさと学習担当

・南志見検定の作成
・閉校記念誌の作成
・勤労体験学習の推進
・地域ボランティアへの参加

学習環境部

●豊かな人間関係担当

・生徒集会と南中集会
・いじめアンケートの実施
・ QU の活用

●地域人材の活用担当

・総合的な学習時間の充実（沈金・地域学習）

●体づくり担当

・部活動指導の充実
・体力アップ作戦の実施
・同トレーニングの実施

５　研究構想図

南中『自分さがし・夢さがし』プラン（研究構想図）

自　己　実　現
【自分の未来を切り拓く力の育成】

【めざす生徒像】

・豊かな体験を基に、身につけた知識や技能を使い、意欲的に課題解決を図ろうとする生徒
・自分の将来に夢や希望を持ち、人とのつながりを深めながら主体的に進路選択できる生徒
・話をしっかり聞いて、自分の考えや意見を持ち、切磋琢磨しながら目標の実現に努力する生徒

保護者・教師の願い・市教育目標　　生徒や学校・地域の実態

【研究テーマ】
『　確かな学力の向上につなげる「活用力」の育成　』

【研究仮説】

①授業を深める場面で、「活用」を意図した学習場面の工夫を継続すれば、「活用力」が身に付くであろう。
②生徒が身につけた知識や技能を活用する楽しさに気づき、意欲的に授業に取り組めば、「活用力」が高まり、確かな学力の育成につながるであろう。
③教師・生徒・保護者が連携して「活用」を意識した体験や学習に取り組めば、見通しを持った学習ができ、併せて「活用力」も伸びるであろう。

第１の柱　【「活用力」（思考力・判断力・表現力）を育てる実践】

〔確かな学力〕＝〔基礎的・基本的な知識・技能の習得〕＋〔活用力〕＋〔学習意欲〕＋〔プラスαの力〕

＊〔プラスαの力〕＝「南中生としての教養」＋「豊かな体験・読書量」

(1)授業を通して「活用力」を育成する手だて

①生徒の実態把握
②教師の「活用力」のとらえの把握
③3年間の教科指導の目標（ゴール）の設定
④3年間を見通した指導計画と単元計画の作成
⑤ビデオを活用した校内授業研究の実践
⑥授業の中に「考える場面」「表現する場面」をできるだけ多く取り入れる

(2)授業外で「活用力」を育成する手だて

①「思考力・判断力」を養う親子読書の推進
・南中読書リストの読破
・親子ふれあいタイムの取り組み
②［表現力」を育てる生徒会活動と宿題
・南中集会の工夫・表現の貯金ノート
③「意欲」を育てる学校行事と探究活動
・主体性を生かした学校行事の創造
・夏休みを利用した探究活動

(3)「活用力」を検証する手だて

①単元テストの実施と分析・指導
②国・県学力調査の分析と活用
③学力診断テストの実施と分析・指導
④「活用力」の問題を含む定期テストの作成

第２の柱【キャリア教育の充実】

①系統図をふまえた進路学習の実践
②特色ある進路学習
・職業人講話　・親子職場体験学習
・先輩の話を聞く会
③修学旅行と進路学習の連結
④あらゆる場面で人間関係形成能力の育成

第３の柱　【豊かな学習環境づくり】

①きめ細かな生徒指導の実践
②文武両道の精神を基盤とする部活動指導
③保護者、地域人材の積極的活用と協働
④安全教育の徹底
⑤主体性を育てる生徒会活動の充実

６　研究の内容

（１）「活用力」の捉え

本校では全教員が、平成20年4月に行われた全国学力学習状況調査の【国語B】【数学B】の問題を解き、「活用力」のイメージについて意見交換の場を持った。その後、「活用力」の捉え方について共通理解を図り、新学習指導要領の理念をふまえて「活用力」は思考力・判断力・表現力の3つの要素からなると考えた。 そして「活用力」は、知識や技能をしっかり身につける（習得）段階から豊富なドリルによって身につけた知識や技能を使いこなす段階を経て、必要に応じてそれらの知識や技能を単独、又は組み合わせて使う場面を授業の中にバランスよく取り入れ、継続実践する中で高めることができると考えた。

具体的には、本年度は授業の中に「考える場面」「表現する場面」を教科の特性に配慮しながら、可能な限り多く取り入れることにした。「表現する場面」では、主に「話す・聞く・書く」に焦点を当てた活動を仕組むように努めた。来年度は全教科で「表現する場面」を授業の中に仕組み、生徒の「活用力」の向上を図りたいと思っている。

（２）「活用力」を高めるための具体的な手だて

①全教科で「活用力」が身に付いた生徒のイメージ像（一覧表）を作成する（A － 2参照）。

・「活用力」が身に付いた生徒の姿をゴールとし、各学年段階の到達度を具体化する。

②授業力の向上

・2つの方法による授業研究の推進（教科の枠にこだわらない議論）

A	指導案検討	→	模擬授業	→	実際の授業（ビデオ）→	授業整理会
B	指導案検討	→	実際の授業（ビデオ）→	授業整理会	→	模擬授業

③授業のパターン分類

〔パターン1〕知識・技能の習得を中心とする授業　【習得】
〔パターン2〕知識・技能を使いこなす（ドリル）ことを中心とする授業　【習得】
〔パターン3〕既習の知識・技能を使って「考える場面」のある授業　【活用】
〔パターン4〕既習の知識・技能を使って「表現する場面」のある授業　【活用】

④市内の全中学校（6校）との連携による授業研究の推進

各中学校への指導案の発送→研修会への参加依頼→授業参観→授業整理会（意見交流）

⑤生徒に「活用の楽しさ」を伝える努力

定期的な生徒向けオリエンテーションを実施し、既習の知識や技能を使って課題解決を図ることの楽しさを浸透させる。

⑥県基礎学力調査・全国学力・学習状況調査の分析結果の活用

数学・理科を苦手とする生徒が多いので、それらの教科の正答率の低い領域について、重点的な補充学習（全教員による個別的指導）を実施する。

⑦活用の場面を意識した授業づくりの工夫

・「表現する場面」のある授業づくりについての共通理解を図り、実践する。

・教科の特性や生徒の実態に配慮し、「考える場面」のある授業から「表現する場面」のある授業へ段階的に発展させる。

⑧よりよい表現のための取り組み（【話す側】に焦点を当てた共通実践）

○大きな声ではっきり話す　【1年生】
○語尾をはっきり言う　【1年生】
○伝えようとする工夫　【2・3年生】
（アイコンタクト・表情・ジェスチャー）
○問題意識を持って相手の意見を聞く
【3年生】